

# 全佛通信

三月号  
発行所  
財団法人  
全日本仏教会  
東京都中央区築地  
三ノ一(本願寺内)  
電話 〇三三三  
振替東京三三〇〇  
発行人 阿部電伝  
編集者 伊東堅純  
印刷所 ルンビニ社

## 為替の自由化と

### 仏教徒の海外旅行

いよいよ此の四月から為替が自由化する。それに伴い、外国製の各種製品が続々と日本へ入ってくるが、同時に日本人の海外各地への旅行も一層激しさを増すことは明らかである。

我々仏教徒も勢い足を海外へ運び、彼我の交流は近年に於て盛んになるにちがいない。正に空前の海外旅行ブームをかもし出すことになる。戦後の外貨確保に窺々としていた時代では、とても考えられない広々とした門戸が開かれたのである。ごく最近でも、個々の団体や、宗派或は一つの寺院でさえ信徒を集め、一つのパーティを組織して、印度の仏跡巡拝に或は東南アジアの仏教諸地域の視察に出かけて、それぞれ大きな成果をあげているように、海に喜ばしいことである。しかし、過去において或る仏教系団体の一団員が外国で談笑の一時に洩らしたふとした発言が、大きな誤解をまねき、国際問題にまで発展する憂いを持つ

ったと云う事実は、私共日本仏教徒にとって黙視出来ない大問題であると思う。

こうした誤解は、唯単にその個人の譴責で止むものではなく、日本への不信であり、日本人に対する失望感であり、日本仏教界への信頼失墜にもつながる問題で、その影響の大きいことに充分留意せねばならない。その直接の影響が、我々仏教徒の場合から全仏に及びて来るのであるから、極めて迷惑な話である。親善を旗印にした代表が、誤解と云う土産を持ち帰るようなもので、仏教国であるわが国の威信の失墜にもつながり、日本にとって大きなマイナスにもなるのである。

第二に我々が常に留意しなければならぬことに「エチケット」の問題がある。世界中で最も結束力の強い人種は、中国人であり、ユダヤ人である。これらは彼等の活躍する社会を見て、瞭然として居る。しかし我々日本人は島国

根性を持ち合わせ、集団としての行動力の弱い人種も少ない。例えば海外各地にある日本人会の場合がそうである。全部が全部そうでないにしても、仲々まとまらない。勝手にその国の「評価」をしたがる。或は蔑視する。特に素通りの旅行者は決してこのような軽率な態度やマナーはとってはならない。或る外国人が「食堂の中で一番騒々しいテーブルは日本人」と云っていたが、残念ならその通りなのである。ホテルの階廊を浴衣や下着のまま、悠然とした態度で罷り通る。所きらわず痰唾を吐く等々、文化人の成すべきことではなからう。数年前ラングーンを訪問したわが国の或る政府高官は、バゴダ参詣の際、土足で階廊へ上りこみ散々恥をかいたと云う事である。海外旅行をする場合には、少くともその国の風俗習慣は念頭に入れる必要がある。我々は自らの一挙手一投足を、現地の人々が或は外国人旅行者が注目しているのと云う事を、瞬時も忘れてはなるまい。特に仏教徒の我々は此の点に充分留意し、「旅の恥はかき捨て」と云った無責任極まる態度は、この際つとめて忘れることである。些細な事で日本を、或は仏教界を評価されたのではたまらない。

前述のように、日本仏教徒の海外旅行には少なからず「危険性」がないとは云えない。そこで今後海外へ行かれる仏教徒、或は団体の、現地の人達の誤解をまねかね意味に於ても、必ず「全仏」国際局の窓口を通して出向くと云う、一つの習慣を作る必要がある。

現に、そうしたことを義務づけるべきであるとする声が、全仏傘下の団体や役員などの間に仏教徒である。外地旅行中の日本仏教徒に対する便宜供与にしても、WFB(世界仏教徒連盟)加盟の日本センターとして、在外公館や、各国WFB支部、仏教会等へ正式に通知することが容易でもあり、国際的エチケットでもあり、文字通り「日本仏教代表団」と云う、所謂スジの通った団としての歓迎をうけ、その行程の安全が保障されるからである。

今後のわが仏教徒の海外旅行は益々増加するであろう。充分、仏教徒としての自覚を持ち、その立場をよくわきまき、品格のある言動をとってほしいものである。そうすることが、彼等をして日本仏教界に対する一層の親密感を強め、同時に総じて「日本」に寄せる関心と信頼度を深めさせるのに役立つのであり、「民間外交」の一端を担う日本仏教徒もあろう。(全仏国際局)

### 活発な運動を展開する

#### 全仏文化局

二月十日午後三時より全仏事務局に於て第五回文化専門委員会が開かれ継続審議中であつた「仏教文化会議」設置に就ての議案が慎重に具体面にて審議され、結論として文化局としての直属具体的運動として活発に実施すべきであると諮問され、この諮問事項は同月十三日開かれた常務理事会に於て具体案に就て担当者間に於て充分なる考究を必要とする点を指示され文化専門委員会諮問の本議題は直ちに着手することとなり本極りと成つた。為念  
猶当日出席委員は、(順不同敬

称略)  
松本徳明。白山亮一。真溪義貫。内山憲尚。金岡秀友。長田恒雄。大島忠雄。塩入亮達。西村輝成。西沢はる。増永靈鳳。摩尼清之。早鳥鏡正。峯岸成哉。伊藤道機。(当日欠席なるも前日本問題に関し重大なる件として意見を頂く)事務局 麻布総長。阿部局長。岩野局長。各部長。各主事。

地域仏教会研修懇談会  
二月二十日玉川仏教会を中心として第二回地域仏教会研修懇談会を玉川等々力不動、満願寺別院に於て午後二時より開催した。今回は三木会と共催の形を取り四十五名の三木会員及地域仏教会員の出席にて盛大に開催され誠に有意義な半日を過し得た。  
猶当日は松本徳明師の(1)中共承認のフランスを主体としての今日迄の経過と今後の世界情勢に就て誠に有意義な講演をされ現代思想の指導的理論に就て現代仏教者の宜しく了知しておらねばならぬ点に就き説明され、次いで早大教授、伊藤道機師の(2)仏教者の社会活動に就いて、現代僧侶の実践すべき諸点を判りやすく説明され誠に考えさせられる事多きを知悉された。

なお終つて会場主の御好意により夕食を七時すぎやかに飯談をなされ、午後七時すぎ散会した。  
四月九日 第一生命ホール  
親鸞を賛える音楽の夕べ

真宗音楽協会(末広愛那代表)では、四月九日午後六時半から、東京日比谷の第一生命ホールで、「親鸞を賛える音楽の夕べ」を開催する。当日は大谷大学男性合唱団が出演し、多彩な仏教音楽を演奏する。  
入場料は三百円。申込み先きは東京浅草本願寺(電話 〇一五二六番)へ早目に。

「創価学会の批判的解明」問題

全仏、蓮門連と円満妥決

昭和三十九年十二月九日、全仏時対発刊の刊行物に対する蓮門連より見解書が、全仏当局に手交されて以来、両者数度に亘る交渉の結果、この度円満妥結を見、全仏の措置としては、絶版とし、日蓮聖人に対する礼を欠いたと考えられる表現を用い、且つ発刊手続に周到を欠いたことの遺憾点を表明した回答文書を送達して妥結点に達した。ついでに仏教界の大同団結の気運の醸成されつゝある時機に鑑み、相共に協力して全一的に仏教運動を推進すべく申し合せたのである。因みに、問題点を左記に掲載して諸賢の参考に供する。(全日本仏教会発行「創価学会の批判的解明」に関する見解書より問題点の代表的箇所の抜粋)

二八頁上段 相葉伸氏著「日蓮一折伏一」を引用したあと、それまでひたすら親近した恵心に背反した云々とあるが、右の「それまで」とは文勢上、約二十年に近い日蓮聖人の鎌倉中心時代をさすことになり、本書の解釈は、今日一般的な学問常識をはるかにこえたもので、したがって当然論証を必要とする。またその表現は甚だ穩当を欠くものといわねばならない。

二九頁上段 仁戸田六三郎著「日本人」を参照しつつ、いふなれば、日蓮の人間形成は、政治的社会的な相対的自覚の上に成り立っており、法然、親鸞の如く、自己省察を人間一般の実存苦として哲学的、宗教的に究明しようとしたものではない。という表現は、法然、親鸞二師に比して、日蓮聖人の立場は宗教的にいかにも低次であることを印象づけようとしているものである。かつ、それに続いて、日蓮自身が「矛盾の二重の性格」が、直ちに「牧口と戸田に開花している」という表現は、二八頁上段第一行に、いわゆる矛盾の要素が「分裂的でなく一個の人格の中に統合されているところに日蓮の宗教的人格がうかがえる」と指摘しているのといわねばならない。

このみ問題意識を集中して論じているが、法華経信仰を国家権力のもとにひろめるための機関として「戒壇」建立を目的とした日蓮の真意は、その熾烈な民族主義と国家意識とであった。という論理は、およそ学的良心を欠如する主観的推論である。

四五頁上段一五六頁下段 ここでは日蓮聖人の末法観を論じて、日蓮の場合は、これ(法然・親鸞)と対照して、危機を外在的・現象的にとらえて、危機の社会化・政治化を強調しており従って宗教に本質的な深い自己省察に欠けており……と、これまた二九頁と同様、いなを、浄土教的立場から意識的に低く評価づけを行なっている。ことに五六頁の上段末行から下段にかけて、ここに日蓮が極めて政策的識見を持つ煽動者の性格を持つことがうかがわれる。

四七頁下段 日本一の僻人として万人指彈のうちにあって、わずかにその熱情を保ち得たのは「宗教的ヒロイズム」であり、そのことは法華経行者に加えられた種々の災害、困難に耐えゆく苦悩主義いし得るならそこまで自己を追いつめてゆく自虐主義を肯定していることによつて明らかである。とある如きは、一宗の祖師に対する敬意を欠くこと甚だしく、創価学会批判という限度をはるかにこえて、日蓮聖人自身への非常に独断的な批判となっている。

読売ランドへ仏舍利

全仏これに協賛

読売新聞社がかねてから東京玉川に建設を急いでいる「読売ランド」は近く完成を見るが、このほどセイロンから仏舍利が、又、パキスタンから仏髪が夫々贈られることになった。

セイロン政府は同国に仏教が初めて伝ったミヒンターレ寺院と協議し、日七両国の友好親善の増進と、仏教興隆を目的として読売新聞社主正力松太郎氏へ仏舍利が贈呈されることになり、読売側ではこの聖骨を読売ランドの丘にパゴダを建設し、その中に仏舍利を安置して一般にも公開し礼拝の対象にしようとするものである。

なお二月二十七日午後一時からこの仏舍利と仏髪奉迎についての第一回打合せが東京銀座の読売新聞社で、全仏、東仏、仏婦、仏青、つ全青協、関東リースクラブ等が集て行が、全仏はこれに協賛して盛大な奉迎陣をひらく意向のようである。なお、これと同時に日パ両国の親善の主旨でパキスタン政府のキモ入りで、チッタゴンの寺院より二千五百年前の釈尊の遺髪が、同じく読売ランドの聖地のパゴダへ贈られるが、毎年「ウエサカ祭」の日には、釈尊を偲ぶ式典を行うもようである。

仏舍利は四月八日空路羽田空港へ到着することになっている。

豊山派の帰国報告会

訪印使節と勝又教授らを歓迎 三月月に上る欧米の宗教事情を視察して一月中旬帰国した、大正大学教授の勝又俊教授、並に加藤

章一師と、小野塚庶務部長を団長とする真言宗豊山派派遣の、訪印親善使節団の合同歓迎帰国報告会が、豊山派宗務所(金林宥高総長)の主催で、東京音羽の同宗務所ホールで盛大に開催された。

法業のち、平林宗務部長の挨拶、川田教学部長の挨拶があり、祝辞にうつり全仏から中山国際局長が出席して挨拶を述べた。帰国報告では勝又教授より、米国では特にシカゴ、ハーバード両大学で東洋学の中の日本学で、仏教が盛んに研究されている。高野山真言宗が仏教を盛んに高揚宣布にとめており、大学教授として二人ほど米国に居るなど特筆すべきことであると報告をなし、終つて加藤教授、小野塚調澄師の順で報告がなされ、テーブルスピーチに入り、参席各師より盛んな挨拶があり、午後四時半頃散会した。

総務委員会開かる

全仏の財団基金拡充策を諮問する総務専門委員会(長野隆法委員長)は、二月十三日午後一時半から東京築地本願寺特別室で開催し「財団基金拡充」について各委員から夫々有益な意見の開陳があった。その中には、①寄附方策、②株式方式、③積極的事業の主催に伴う純益獲得方策などがあつた。なお事務当局で立案して関係機関に諮つた上で実行に移ることで午後三時閉会した。当日は長野隆法、小野塚調澄、神野真一、藤原俊、源玄英、小沢照博、吉本道親、木村智広の各委員、当局側から麻布総長、阿部、二の宮、岩野の各局長、伊東部長、鎌田主事。

### ブラジル賞勲協会が 高階会長に文化功労章贈る

#### 仏教による日伯親善に多大の貢献

毎年「桜」の母国親光団を組織して、日本親光を企画している、ブラジル仏教徒協議会(辻本井代表)では、本年も三十名の親光団を派遣することになり、同国は三月四日頃大阪商船「さくら丸」でなつかしの東京港へ到着することになった。

辻本同協議会代表は同親光団の受入れ準備のため、過日空路来日し、全仏へも挨拶に見えたが、同氏の尽力もあり、全仏会長高階龍仙師へ、ブラジル聖州政府の委嘱により、ブラジル賞勲協会から贈られた「ジョゼー・ポニファシヨ文化功労章」を持参した。

これは多年に亘って、宗教を通じて日伯両国の友好親善に大いなる貢献をされた高階師の実績に對して贈られたもので、全仏では過日麻布事務総長、阿部、二の宮

は断じて承服出来ない。世界仏教徒間の友誼を破壊せんとする、かかる陰謀活動を十分警戒するよう要請する、と云うものであるが、全仏では多分に政治的な問題が介在しているので慎重に対処してゆきたいと云っている。

#### 妙心寺管長ら 中近東諸国視察に出発

イスラエル、クエートなど中近東諸国の聖蹟視察の目的で、古川大航臨濟宗妙心寺派管長、村上慈海金閣寺住職、芝原行戒大生寺住職、清陀真一古川管長侍衣の各師が、三月三日午後五時徳山港発の日昇丸で出発することになった。

古川管長ら一行は途中海上慰霊祭を印度洋で行うほか、パキスタンへも渡り、最近発見された釈尊

遺髪伝達をうけて四月二十五日頃海路帰国する予定であるが、一行は去る二月十八日午前十時に東京築地の全仏事務局を訪れ、阿部、二の宮局長、柳、岩本部長らと種々懇談挨拶をなした。

#### 摩尼清之師夫妻を囲む会

長年にわたってNHKの宗教放送を担当し、全仏をはじめ各仏教団体で教界のため活躍されていた摩尼清之師は、このほど停年退職したので、同師夫妻を囲んで長年の労苦を謝し、新しい将来を祝福する会が三月七日午後一時から、東京丸の内工業クラブで、麻布照海全仏事務局総長、船口暉子全日仏婦事務局長など、七師が発起人となって開催される。

当日は全仏関係各役員、仏婦、仏青、全仏、事務局員などから多数が出席し、師の前途を祝福する。

### 日本仏教文化会議の設置

#### 全仏常務理事会で承認

全仏常務理事会は二月十三日午前十時三十分より東京築地本願寺特別室にて開催され、左記の議案について協議し夫々結論を得た。

#### 議案

- ①「推薦役員の交替」について  
浄土宗務総長よりの申入れについて
- ②日本仏教文化会議設置について

追加議案 昭和39年度分貸室使用具加金について申入れの件  
会はまづ議長に、理事長指名の平林有高師が就き、挨拶ののち署名委員に金剛秀一師を指名し、第1号議案が上程された。これについては阿部総務局長より詳細に亘

#### 各宗派の人事異動

顯本法華宗  
このたび任期満了にともない、管長に吉永日洋師、宗務総長に朝倉俊夫師が夫々選任された。

#### 曹洞宗

宗務事情により次のように更迭があった。

- 新 秘書課長 渡辺秀雄師
- 旧 教化部長 竜谷孝倫師
- 旧 秘書課長 若槻修道師
- 新 教化部長 二の宮清海師

#### 全仏

浄土宗よりの申入れに基き、常務理事会で次のように決定を見た。評議員に曾和探玄師、理事に評議員の新谷寛成師が就任した。なお岩野真雄師は評議員、理事、常務理事を夫々辞任した。

#### 印度救ライセター 定礎式の報告会

一部既報のとおり、昨年十二月十五日印度のアグラ市で挙行された、印度救ライセターの定礎式には、全仏会長メッセーザが送られ、そのもようは仲々盛大であったと云われているが、二月十一日午後一時からその報告会が、印度救ライセター事業後援会(石坂泰三会長)の主催で、東京丸の内日本工業クラブで開催された。まづアジア救ライ協会常任理事藤原勘治氏の挨拶があり、ついで那須皓同協会の理事長から、この定礎式は高僧の首相をはじめ、印度政府高官や民衆約二万人が詰めかけ、日本国民の善意を心から喜んでくれた旨報告があった。このあと宮崎医学博士の解説で定礎式の記録映画が上映され、午後四時すぎ報告会を終った。

当日はアジア救ライ協会理事、元百相石橋山氏、石坂泰三経団連会長、那須皓同協会の理事、理事長、同協会常任理事宮崎氏らが出席した。

その内容としては、WFB本部のラングドンよりバンコックへの移動で、WFB規約を無視した非法措置であり、一種の連盟私有化の行為である。中国仏教協会(WFB中華人民共和国支部)として

はだか説法

威儀を整え如法に戒を授ずけて後説教をなさるが、内容も亦前向の話であり、両方相俟って十分効果をあげると信ずる。世の流は早くそれにあらずは困難を極める。爺さん婆さんだけを相手にしているだけでは如何なるものであろうか。説教場には法を聴く者が少ない。威儀も整えることも出来ず内容も乏しい私は「はだか説法」を試みている。それは、巡航船の中で、仕事を休憩している時、祖母方は時と処をえらばず、人をえらばず仏縁を結ばせ、信者を一人ずつ獲得された。仕事も忙がしく夜はテレビで楽しんでる人を集めることは、秀れた方でなくては困難である。

私はこうして

布教している

ろうか。なんとなしに仏教の味がにじみ出たらよいのではなからうか。話す第一は先輩の話をよくきくことであり、話そうという気があれば教材に事欠かぬと思う。なるほどと思うことは書き留めていくこと。又現代人は数字をあげて説明しないと納得しないほど、合理的科学的に訓練されている。法話の後質問をうけて答える一時をもちたいと思う。はだかて話す、自分の考えているものを信仰をそのまま訴えていく、はだか説法が必要だと考える。時には首尾一貫しなくても、よいのではなからうか。法をきく者に秀れた者があれ

位生前の徳を讃える。戒名の説明をし、その人柄に関して話す。泣いてくれる親族もあり、施主から鄭重な礼を頂く、道歌や一句一偈を耳からだけでは入りにくいので黒板に書いていく。同じ話も出来ないで夜も僅かな睡りで法話を考えていく、真剣に努力する所に法が生かされていく、どんな時でも話しかける。

一句一偈の法の実例

「サシセス」から「カキケケ」の婦人になりましょう。即ち今までの婦人は、裁縫ばかりしている「サ」辛抱ばかりしている「シ」炊事のみの「ス」洗濯の「セ

牧野 俊 雄

(三重県曹洞宗普濟寺住職)

ば謙虚に教を乞うのも亦必要と考える。自分の檀家の大部分が他宗教に傾きかけた時こそ、真実の布教が生れると考える。海に怠け心を叱りつけ、はだか説法を試みている。

葬儀の法話(昭和三十五年から)

人生の最後で厳肅な悲しみの式を司ることの有難さをしみじみ味わっている。亡き人の善行を承ることはどれほど人生修行に役立つことか、生きた人生哲学である。

この式に法話をするには最も印象を強く植えつけ信仰の芽ばえに役立つ。開蓮忌を寺で行ない、初願忌を行なうまで十分か十五分

ないでどんな仕事の苦しいのも自分で進んでする苦勞の「ク」常不輕菩薩の様に若い者を尊重し力づけていく謙虚な「ケ」父母に対して孝養をつくす「コ」即ちサシセスも改善しつつカキケケになりましょう。

恩

恩の字を因と心にわけ、因の字は国即ち囲の中に人が両手を掲げてゆったりと大の字になつて休んでいふ形です。即ちより所という意味原因の因であります。心はころころと動いてやまないのだからころころと動いてやまないのであります。それも好き嫌いという感情のままに動くのです。善悪の方にも動き、悪い方にも動き易いものです。その心の上に現在の地位の原因はどこにあるか、誰の御陰であるか、ころころころがる心をしつかりして考えることが大切です。知恩から感恩更に報恩へと進み発展していく。又この恩という字は日本読み訓はなく中国よみの音だけであります。この様な例は極く稀であります。文字が入つてから我々の先祖の血となり肉となつたので花なら菊や蘭でありまして静かに恩をきせるのでなく恩を施し又恩に報いましょう。

安心

安は門、(冠即ち家の中に家庭の中に女即ち母親がいるというのです。私達少年少女時代家に帰るとお母さんと呼び、いと安心しないところがかりする思い出は誰しももっています。その母は求め心のない仏の慈悲と同じであり信仰も亦母の懐にとびこむ絶対婦

依の姿である。母の愛も我が子の愛から披けて社会の、人々、人類の為めにつくす崇高な慈悲心にと訴える。

冥加

冥土の冥即ち黒い所、目に見えない所から加わつてくる力、神仏の有難い力をいうのであって、若い人々が神仏の存在を否定して、これが科学的だと考える。そんな目に見えないから無いという。そんな単純なものでなくこの宇宙社会を不可思議な力でもって動かしていくものへの敬虔な態度をとる宗教的情操を培養していく。その加被力、小にしては祖先の霊います仏壇に報恩謝徳のため美しい花、香、光、水等その外頂きものを供える。この情操を深めていく。近頃外国流といひ、客人の目の前で頂いてしまふのを美德と考へるが、外国人の方で先祖に供えてから皆で頂く。最初の給料を供え先祖に報告する報恩行を美德と考へ真似ようとしてゐる。家庭の儀も仏壇を中心にする争ひのない和合の姿等を教える。

むすび

住職となつて三年半、日々の生活が仏より賜つた喜びを感じ檀家の人々の限らない愛をうけて、先に憂い後に楽しむという自分の出来ることは何でもしようと思つて、先生命の精神で進んでいる。喜びに胸をふくらませ檀家の人々全部が一步前進するよう努めている。邪魔な人間でなく、町の必要な僧侶にならうと心がけて……

(曹洞宗報三四六号一月号より転載)